

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第8号／1987年（昭和62年）11月15日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉〔東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL 03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL 0438-62-9121〕 発行人＝石井哲夫／編集人＝友田・明峯・須賀

自立について

高橋彰彦

国際障害者年以来、障害者の自立の問題が取り上げられるようになって、多くの人がこのことについて論じている。それらの議論でいつも問題になるのが、「自立とはなんだ」とか「自立生活とはどんなことか」というような議論である。

普通、自立生活と言えば、他人の助けを借りずに、仕事について収入を得て自分の生活を自分で維持して社会生活をしていくこと、というように考えるのが一般的であろう。これは一般的にはその通りであるが、障害の重い人の場合にはそのままではあてはまらないことである。自分の身の回りのことを自分でやること、仕事について生活を維持できるような収入を得ること、はいずれも障害者にとっては困難なことで、障害の重い人ではほとんど不可能なことになる。自立ということをそういう意味だとすれば、障害者の中に自立できる人と自立できない人との区別を設けることになり、障害者の間に差別を生むことになる。すなわち、自立のできる障害者とできない障害者とを分けることは誤りであって、自立の問題を考える時には、すべての障害者にあてはまる『自立』のありかたを探らなければならない。

では、すべての障害者にあてはまる自立というのはどんな形、どういう状態のことを言うのであろうか。それに答えるには、以下のことを先ず明らかにしておく必要がある。

1. 自立というのは、誰からも、どんな形の

も、一切の助けを受けずに生活することなのか？

2. 自立というのは一般企業に就職することなのか？

3. 自立というのは自分の収入で自分の生活を賄うことか？

第一のことについて言えば、人は誰でも、障害の有無にかかわらず、世の中に生きていくためにはいろいろな人の援助を必要としているということを認めることが先決である。障害者というのは、普通の人とは違った種類の援助を普通よりも余分に必要とする人だということの認識が出発点となる。

第二と第三のことについては、人生の目的は就職することだけではないということ、すなわち働くことそのことが人生の目的なのではなくて、働くことによって得られる満足感や充実感、そして労働によって得られる収入を使つての楽しみというようなことが大切なことである。又、労働の対価としての賃金の額と、生活に必要な金額とが必ず同じでなければならないことはない、換言すれば、収入の不足は公的な補助で補うことができればいい、とする考えが必要であらう。

ここで強調したいことは、精神の独立、自由さということである。日常生活の上で他人の世話を受けていても、自分で自分の生活の方向を決定し、自分に必要な援助を表明し、不必要なことを「ノー」と言って拒否できる心を持つことが自立の基本的な姿であらう。

（6頁下段に続く）

施設で生活している人たちは、職員も利用者たちも、生活の仕方が正常でなくなってしまうものである。

正常な生活を定義すること自体むずかしいことであるが、思いつくまに、いくつかの内容をあげてみよう。

正常な生活とは

(1) くつろげる場所をもっていること。

私は旅行に出ることが多いが、他所で安眠出来たためしが無い。疲れたり、深酒を飲んで正体無く眠りこんでしまうこともあるが、決して安眠したわけではなく、いつも軽く緊張しているようである。その証拠に、家にいて、丸一日休息出来た夜の深い眠りは、誰にも邪魔されたくない大切なものだと思っている。

(2) 楽しめることをもっていること。

子どもの時から映画好きの私はテレビ時代になって、全く映画館にいかなくなってしまった。その代り、ビデオを使って好きな映画を録画して、暇を作っては観ることにしている。ただ一時間半の間を一度にとることが出来ず、三回ぐらいに分けて、休みの時の楽しい一刻を持つことにしている。

又、小さな庭に木を植えて、その中で放心したように緑を観ていることも楽しめることのひとつである。

こうして改めて考えてみると、楽しめることを沢山持っていて、手持無沙汰でやる事が無いなどということが無い。ただ忙がしいために限られた楽しみとなっていて、いささか淋しいことではあるが……。

(3) 大切にしたり、されたりする人がいること。

改めて人間関係のことをとりあげる必要も無いほど、当然ともい

正常な生活

石井哲夫

うべき人間生活の正常さを保つ条件であろう。しかし大切にしたり、されたりというだけでなく、粗末にしたり、されたりすることも多く、苦勞するところである。もちろん、けんかもあり、抑圧ありというところに平板でない人間関係の動きがあって、本質的な人間の大切さを感じる心は曇りがちなのである。

(4) ノルマをもっていること。

ノルマという表現は、適切なものとは言えないが、義務感という

か、しなければならぬことを背負っていることが正常な生活を営んでいる人の姿なのである。明日までにやっておく仕事とか、毎日必ず行う掃除などは、人によっての多少の違いがあっても、一種の義務感と言わなければならない。いつもあわてていて、目の前にやるべきことを沢山抱えて、苦しんでいるようにいても、それによって得られている生甲斐も大きいものなのである。

(5) 選択の自由があること。

選んで、今夜何を食べようとするかという選択まで、人間は自分で選び、自分で決めて生活していることが多い。その時々で、面倒くさいとか、誰かがきめてくれたらよいなどと思うこともあるが、いざ選択の自由を奪われてみると、これはど情けないことはないと思うに違いない。正常な生活に不可欠な条件だと思うわけである。

(6) 冒険心が持てること。

人間には、いろいろな欲望があり、新しい経験を求めることも喜

びの一つである。旅行も趣味も学習も、時にはギャンブルや利殖なども新しい経験となり得るものである。そして、これらの新しい経験には多分に冒険心が必要になってくる。失敗を恐れず新しい体験を得ることに向う気持は、人間としての自己開発の機会をもたらすものである。

(7) 社会的な緊張を得ること。

社会参加の具体的な事実として人との付き合いや、社会から認められている仕事への参加などといういささか緊張を必要とする経験が生じてくる。このことは如何に好まなくとも、避けられないことであり、マナーを心得、言葉づかいを選び、与えられ、期待される役割を果たすことにとめなければならない。

以上のような種々の事柄を考えると、わが施設で生活している職員や仲間たちには、かなり各項目の事柄において不足や偏っていることに気がつくことと思う。そして、これが自分のおかれていく境遇ゆえと思ひ込んでいて、そこから脱け出るための方策を考えていないということを思い知らされると思うのであるが、どうだろうか。



新理事長の 就任にあたって

奥村幸子

須藤晃弘理事長が亡くなって、五ヶ月が経とうとしている。昭和三八年、石井先生と出会い、共に社会福祉の仕事をしたと決められてから、二十数年、「金は出すが口は出さない」と言われた通りの姿勢を通して来られた。資金面は理事長が、実践面の責任は石井常務理事が負うという形で、我々職員は安心して日々の仕事に勤しむことが出来たことは有難いことだった。口は出さない、とおっしゃりながら、大雨が降れば、朝一番に電話で「施設は大丈夫か？」とたずねて下さり、又「誠心誠意仕事をすれば、結果は必ずついてくる」「地元の人達によく気を

配りなさい」「石井先生がここ迄仕事を大きくしたのだということ忘れてはいけない。石井先生を中心に勉強して一生懸命やりなさい」と何う度にもその時々を感じられていることを熱心に話して下さった。自閉症のことはわからないとおっしゃりながら「人のことがわからぬ、ということ、それだけで大変なことだ。自閉症は全員重度だよ」など、ハッとするようなことを聞かされ、改めて理事長の見識にふれた思いがしたものである。

数年前から、病氣療養を中心に生活されるようになり、法人の二十周年記念のパーティを最後に施設に顔をみせて下さることがなくなりましたが、幸い、御長男の須藤祐司理事が副理事長として、理事長と我々の橋渡しの役を勤めてくださった。須藤晃弘理事長が亡くなったことは、大きな支えを失った感深い、現実の仕事は、新しい体制にスムーズに引継がれる為のウォームアップがなされていた訳である。

八月三十日の理事会で、改めて須藤祐司理事が、新理事長として満場一致で就任されることが決まった。席上、松島正儀理事より、理事長の交替という大変な事態を関係者一同、何の不安もなく迎えることの出来ることを運営の円滑さのまねな例として喜びに耐えないという発言をいただいた。

例えば、社会福祉法人嬉泉の理事会は、発足の当初から、理事諸先生方の、個人的利害と関わりのない、全くのボランティアな立場での御努力によって支えられてきた。今回の理事長交替をはじめとして、いくたの大きい出来事を超えて来た歴史があるが、常に、純粹に法人の仕事の円滑な運営と、将来への配慮という共通の立場から常に意見の一致をみてきた。社会的に重責を担っていらっしゃる方々の集りであるにも拘らず、理事会は監事の先生を含め、いつもなごやかに議事が進行している。新理事長を迎えて、理事会が再発足することを機会に、理事及び監事の諸先生方を御紹介したいと思う。



（理事長） 須藤 祐司 特定医療法人嬉泉会 理事長・嬉泉病院院長		（常務理事） 石井 哲夫 日本社会事業大学教授		（理事） 松島 正儀 社会福祉法人東京育 成園理事長		品川 不二郎 洗足学園大学教授 横浜市立大学名誉教 授		外林 大作 大妻女子大学教授 （以上発足時より、以下就任順）		平井 信義 日本放送大学教授 日本大学医学部名誉 教授		仲村 優一 日本大学医学部名誉 教授		大島 研三 嬉泉病院事務局長 春日部嬉泉病院院長		多田 軌 社会福祉・医療事業 団保険部長		須藤 祐正 東京都社会福祉協議 会参与		酒井 縁男 東京都社会福祉協議 会参与		町田 英一 社会福祉法人嬉泉子 どもの生活研究所 ばえ学園園長		出口 晴三 社会福祉法人嬉泉 幼稚園園長		奥村 幸子 社会福祉法人嬉泉 幼稚園園長		山根美江子 社会福祉法人嬉泉 幼稚園園長		（監事） 茂呂 政利 会計事務所経営 社会福祉調査会常務 理事		村上松五郎	
---	--	--	--	---	--	--	--	---	--	--	--	-----------------------------------	--	---	--	-------------------------------------	--	------------------------------------	--	------------------------------------	--	--	--	-------------------------------------	--	-------------------------------------	--	-------------------------------------	--	--	--	--------------	--

私たちの

うやうや

須藤福祉センター各事業所からの報告

そよかぜ組の近況

喜多 克彦

そよかぜ組は、一五人の子どもで構成され、場所は、のびろ学園の東端にあります。食堂・浴室等を独立して持つため、他のグループから隔離して暮らすことができます。

隔離することのメリットは、一に刺激の制限ができる事、二に流性性の疾患を防げる事です。相性の悪い子同士の鉢合わせを防げる事は、職員にとってもありがたい事です。

この子達は、一般的に集団生活が苦手です。人との関わりといっても、ほとんどが職員対子どもであり、子ども同士の関わりが少ないようです。一五人それぞれがバラバラの関わりを職員に求めてくるので、職員の動き方は、めまぐるしいです。箱車を押しているかと思ったら、トイレ掃除を始めた

り、カセットテープをかけてあげたり、腰かけて話相手をしたり、おもちゃ箱の鍵を開けにいたり、で、一時的な人手不足の状態が頻発しています。

そよかぜ組では、ほとんどのものに鍵がかかっている一々職員が鍵を開けてあげないと利用できないようになっていきます。テレビをつける、カセットレコーダーをつける、衣類の出入れ、おもちゃをとる、寝室に出入りする、筆記用具を使う、トイレトペーパーの補充、手洗タオルの交換、ほろきでく事、ゴミを捨てる、ゴミ箱までが鍵のかかる所に収納されています。どうしてこのようになっていくのかといえ、かつてテレビ、ラジカセ、ゴミ箱等を投げつけられ、新品の物が一瞬にして使えなくなったり、部屋中ゴミだらけになったり、壁一面にマジックインキで落書きされた経験があるからです。子ども達は鍵がかかっている状態をよく知っていて、

鍵の開閉めのために職員を使うといっているくらいです。

そよかぜ組の日課は、まず一番は、三度の食事。二番は、午前と午後のセブイレブンに立寄るドライブ。三番は、朝夕の入浴。四番は、朝夕の集り、といった内容でどれも参加希望者のみの参加で、参加したがない子どもを誘うという事は、ほとんどしません。

食事は、現在、肥満が最大の問題になっているため、メニュー以外の物は、極力押え、メニューのものを食べられない子にはメニュー以外のものを食べられるように配慮し、いつも一定量、一定品目でおさめるように努力しています。食事中、食品や食器が飛びかたりする事が多かったのですが、最近、やや減ってきたように思っています。みそ汁がなべごととひっくりかえったり、大皿のおかずがまきちらされた時の掃除は、結構大変でした。

ドライブには、車に乗る事が好きな子の他買物の好きな子どもが行きます。毎日一定コースで、毎日ほぼ同じようなものを同じ量位買うようです。

入浴は、一日二回あって、一回目は朝食前、二回目は夕食後です。一日一回は、入れるようにしてい

ます。好きな子は一日二回入浴します。

集りの内容は、開催する職員によって違い、ギターで歌ってくれる職員、算数問題をやる職員、キヤッチボールをする職員という具合になっています。

そよかぜ組ではガラスの破損が大変多かったのですが、破損するたびにアクリルガラスに変えてきた事もあって、最近は少なくなりました。三ヶ月前アクリルガラスに体当たりした子がいましたが、アクリルのため割れずに、枠のアルミサッシがひしゃげるという事故がありました。



ひかりのタイムス

独立号

須藤理事長をしのぶ

山岸 裕

私個人、理事長にお逢いしたのは、ひかりの入園式典の時お逢いした。

赤いチャンチャンコを着て明るくふるまっていた。好々爺の印象がある。それだけだ。

その人の逝去。これは、法人にとって一つの節目だ。

一つの組織の創業者リーダーが築いて作って来た時代は終わった。これからは、二代目が遺産を守り大切に継承していく時代だ。

(二代目にプレッシャーをかけて申し分けない。)

嬉泉に一つの時代が静かに終わった。

しかし理事長は、この嬉泉の実質的リーダー石井氏をバックアップしたスポンサーであり、オーナーでもあった。

「金は出すが口は出さない」理事長の一貫した姿勢が、子研・袖ヶ浦のびろ・ひかりのを創り上げ

自らの姓を冠にいただく福祉センターを築いた。

理事長の「功」は大きい。

法人設立二十年目も迎え、法人開設時に生れた世代が、嬉泉に就職するようになった時の流れの中で、一九八七年六月一二日大往生した。

須藤晃弘個人としては、いい人生を生きた 合掌

やまあるきゆたか

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

キャラバン隊の事

村岡 敦

ぼくは、九月十一日(金)から十五日(火)まで、キャラバン交流隊に、参加しました。先生は、森本さん、仲尾正さん、斉藤さん、山崎さん、あとよるおそく石井所

長などが来た。行った場所は、福井県、高山、金沢とかに行った。車はコースターだった。と中子研

で、島田さんとかと一しよになった。でも行く時から、雨がふった。天気不安定でした。と

中で、弁当を買ったり、休けいをした。中央高速を通って行った。山が沢山見えた。そしてトンネルも何個あった。長いトンネルもありました。高山の、宿舎についたのは、暗くなってから。高山線の列車が見えた。あと、風呂は温泉だった。

高山では、つくだに、のりなどを売った。あと、びらをくばったりした。高山は古い町みたいだ。和風の家が多かった。

次に、福井の前川さんという家(民宿)に泊まった。三日泊まったが、普通の家に近かった。福井では、にぎやかな場所だった。ここでは、のり、ピーナツなどを売った。ぼくは袋づめをした。

あと次の日は、金沢の香林坊と言う所で売った。金沢には三年前

ごろ行ったことがある。ここでは、つくだに、ピーナツを売った。金沢では、八月の終わりのようなあつさだった。

あと、高山でも、金沢でも、きつ茶店に入った。福井では、風呂はせん湯に行った。せん湯は始めてである。それから、トラックスの荷物の積みおろしもやった。

この交流キャラバン隊は、けっこう始めての事があった。高山に行ったのは始めてだし、あと小松

空港も始めてだった。それから、名神道路、そして東名道路、東京について、この交流キャラバン隊は終わった。

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

僕の新しい生活

田中 雅也

昭和六二年六月のある朝、学園のきつ茶室で、先生からの話を聞いた。

僕は、パン販売のほかに、できる事をさがしてほしい、との希望を出したら、「社会福祉協議会にたのんだら、袖ヶ浦のすかいらいくの近くの自転車屋のとなりに、富士住建の会社が有って、この若名社長さんが、田中君を大切にめんどろを見たい、との紹介が有りました。是非この富士住建の会社へ仕事の見習いに行きましょ」と話が有りました。

それから、富士住建へ毎週通う事に、なったのですけれど、初めて行く前は、ちょっと不安で、心配だった。

昭和六二年七月から、僕は、富士住建の住宅売りの手続きの会社へ毎週火曜日と水曜日にひかりの学園から、通う事になりました。ここでは、二時間の間に、僕になれている、郵便局へ買物、役所へ

買物、銀行へのちょ金と見習うように、なりました。

この富士住建では、二人の夫婦がともかせぎでとなって、若名茂社長と若名幸子奥さんと二人で社員となっています。

若名茂社長と僕は、自己紹介をしたりして、「どうしても守れない事は、無理しないで、えんりょなく断ってよろしい」と話が有りました。

この時、NHK教育テレビ放映で、僕田中雅也の成長の二五年間のさつえいが有って、写された。この後から、僕は、気分が変わって楽になった。心が変わった。

この富士住建では、将来これからは、社員を増やす予定となって昭和六二年九月から、片平昌彦さんが新入社員となりました。

僕がのびろとひかりののしせつから、一番に、自立できるようだ。百人の代表だ。

もちろんもうこの富士住建の社長夫婦と三人は、親しみが広がった。

山崎先生も友田先生も、将来は、僕のことを、長時間長日富士住建で仕事させて、社員にさせたいと希望をもって、いるらしい。

僕の希望は、東京都内の杉並区の実家から、毎日電車で通勤でき

る所に、通いたい。もちろん千葉でも松戸や船橋が良いけれど、残念ながら、無い。

いつまでたっても、千葉県袖ヶ浦に住みたくな。一生都会で住みたい。

この新しい生活の富士住建も、千葉県袖ヶ浦の田舎で、都心とはちがうのが残念だ。不便だ。

若名社長からの説明だと、「何年か富士住建に、見習いを続けると、しゅう職の社員の資格になれる。」と話を聞きました。

この富士住建も、泊まりがけで、生活のと交通が無い、両方がさびしい。(終)

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

アメリカから やってきた実習生

小野 法郎

九月一日から十一月末まで、米国、北アイオア州立大学、社会福祉学専修のモーリン・ジャンセンさんが、石井所長のスーパージョンの下、社会福祉法人嬉泉において、日本での現場実習をするこ

とになりました。
モーリンは、アメリカの大学生活中にアメリカ人以外の友人と接するチャンスがあり、アジア系の人と接することが好きで、たまた

ま関西外国語大学と母校が交換学生制度があるのを知り、一ヶ年間、日本文化を学ぶために大阪でホームステイの生活をしました。帰米後、社会学教授カージャラ先生から、国際社会福祉を学び、国際福祉プログラムの一員として、第一回目の海外派遣実習生となり、石井所長の下へやってきたのです。

彼女は、七人兄弟の六番目で、この九月で二四歳になるそうです。アイスクリームとチョコレートと天ぷらの大好きなカントリーガールらしい明朗な性格で、将来は、ここで学んだ経験を生かして、アメリカで生活しても、異文化のバックグラウンドを持って援助を必要とする人々の手助けの出来る仕事につきたいと願っているそうです。

『今のボーイフレンドはベトナムの難民なの』と、そっと話して



くれました。

(袖ヶ浦ひかりの学園囑託)

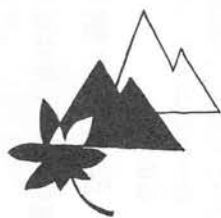
《編集後記》

独立第二号を出しました。私どもものつたない文章を皆様にお届けすることに相成りました。

秋が深まり、読書をするには、格好の季節になりました。そういう時期でも、ひかりの学園の人も元気にやっています。

九月には、キャラバン隊で、飛騨高山・北陸を旅行してきました。子どもたちも楽しんでました。その感想は載っています。是非お読みください。

ひかりのタイムズ丸は、第三号に向けて出航します。



そよかせ組では固形物をほとんど口にしない子ども、ベッドにもぐりつきでめったに食事やトイレに行かない子ども、絶えずつばを吐くため、一步入ると悪臭がプンと鼻をつくという部屋もあります。どの子ども家庭生活が困難で措置

ひかりのキャラ

バン隊奮戦記

森本 照雄

九月十一日朝八時三十分、袖ヶ浦ひかりの学園交流キャラバン隊は、マイクロバスとトラックを連ねて学園を出発した。トラックには、千葉県特産のピーナツ、青柳のつくだ煮、焼のり、カワハギの加工品などの産物と、学園の職業指導で作った「機織作品」と「陶芸作品」が一杯につままっている。マイクロバスにはひかりの学園あゆみ組のメンバーが乗りこみ、キャラバン隊の前途に胸をときめかせている。地図を見たり、話を聞いたり、ルートの提案をしたりと、不安と期待のいりまじった気持ちで手にとるように分る。キャラバン隊は、世田谷の子ども

された子どもですが、その子なりに人間らしさを持ちあわせており、その部分を強調できるように生活を保証し、圧迫される事がないように職員が交通整理をしているといったような感じをめざしております。

(袖ヶ浦のびる学園園長補佐)

もの生活研究所で職員をひろい、いよいよ未知なる土地、未知なる人々のところに向かって出発である。中央自動車道を大月、甲府、諏訪湖と快調に進み中津川に至る。ここは、もう岐阜県である。ここで中央自動車道をおり、一路高山へと向かう。陽はとっぷりと落ち、空腹をかえた隊員たちは、高山の国民宿舎に着くなり、気もそぞろにさっそく食事にとりかかる。山国の宿らしく、山菜や鮎の煮付けや天ぷらがたっぷり出され、皆たらふくおなかにつめこんだ。入浴後床につくなり、長旅に疲れた隊員たちはすぐに眠りこけてしまった。夜中になり、石井所長の一行が到着、明日の販売の打合わせをする。明日は高山市の陣屋で実地販売である。

翌日、キャラバン隊は朝食後早々に出発。本日の目的地、陣屋の朝市方面を目指す。職員の父兄の



協力で確保された販売場所は、人出の多い朝市と古い商家の立ちならぶ通りのちょうど中間にある、日枝神社前の格好のスペースであった。

キャラバン隊の旗を立て、看板を立て、物品をならべ、皆でそろいの祭ばんてんを着ると準備完了。石井所長を始め全員そろって「さあ、いっちゃいよ」と、見知らぬ土地で見知らぬ人々にむかって呼びかけ始めた。村岡君、田中君、小松君はピラを一生懸命配っている。観光客が多いので団体客に配り始めると配りきれず、それでも配ろうとするので、団体と一緒に



雲がくれしてしまったり、うどん屋の中で配っていたり、骨董屋で大好きな時計をみつけてしまったり、時々お団子などを食べにいったしまったりする人もいたが、全員頑張って品物の販売を行った。小原君は愛想よく売ることを覚え、たし、飯田さんは得意の英語で外人観光客に呼びかけた。山岸君、櫛橋君は静かに上品に呼びかけているし、市川君は自分の作品をきこちないながら説明して売っている。地元の人達も応援に駆けつけてくれて地域との交流もささやかではあるが実現し、この日の販売を終了した。お世話になった方々に

挨拶をすませ、キャラバン隊は次の目的地の福井へと向かった。

高山から山間の国道を西へ向かい、キャラバン隊は一路福井市の前川さんの会社の研修所をめざす。前川さんとは途中合流、夜八時頃研修所の竹の館に到着した。皆疲れてはいたものの、竹の館の豪華さにびっくり、用意していただいた料理は、新鮮な魚やえびのさしみが大皿で出され全員大喜び。えびのしっぽを目の前に七つも八つもならべる人もいた。

この日、隊員たちは生れて初めての銭湯行き。タオルを持ってバスで銭湯のりつけたものの、「料金を払い、靴を下駄箱に入れ」といわれる銭湯の使い方など知っている人は一人もおらず、初日はもう大騒ぎ、先客達の目を見開かせるようなシーンもあった。でも、三日目ともなると誰も目立たずに入浴することができるようになっていた。皆一生懸命言われたことを守ろうとしていたのである。

福井市での販売場所は、目抜き通りの放送会館前であった。人通りがかなり多く、宣伝班も場所を決めて集中的に活動、田中君はハンドスピーカーで口上を述べた。など、昨日の販売で覚えたコツをうまく使いながら、懸命に叫び、

呼びこみ、誘っては売りさばいた。この日は、前川さんのついででストッキングが商品となり、池上先生のついでで庖丁が販売された。そして、地元の福井新聞と朝日新聞が取材に訪れた。(石井所長の説明が翌日の朝刊に写真入りで掲載された。)

翌十四日は、北陸自動車道を北上し、金沢市は香林坊の大きなデパートの入口広場で販売を行った。石川県婦人児童課の方々の協力、広場に大きなテントが張られ、暑い陽射しを苦にすることもなく販売活動ができた。昼食には名物のすしをご用意いただき、十分すぎるほどいたれりつくせりという感じでわたしたちの活動に援助を提供していただいた。販売時間の関係で販売量こそ多くはなかったが、実は大勢の方々の惜しみない援助の手がさしのべられたことに販売にきて本当によかったという実感がこみあげてきた。

この日、再び福井市の竹の館にもどり、翌日の帰園の準備をしている時にフト頭に当世風の一句がうかんだ。「遠くまでよくぞきたねとはめられて、九月十一日はキャラバン記念日」

(袖ヶ浦ひかりの学園長)

嬉泉日録

1987年6月14日 須藤晃弘理事長葬儀

7月18, 19日 治療教育研究会主催・第18回治療教育夏期セミナー

7月21日～8月15日 育心会主催・夏期合宿(研修)

8月17～19日 第4回自閉症治療教育セミナー(山崎晃資、太田昌孝、阿部秀雄、海塚敏郎、小林重雄、高橋彰彦、石井哲夫各氏の講義・シンポジウム、実践講座など)

10月25日 第23回嬉泉バザー

こういう形での自立は、自閉症と言われる人にとっては非常に困難なことである。それは、本人だけのことでなく、周囲の人々も彼等の必要とすること、してほしくないこととの見分けをする必要があるが、それは必ずしも容易なことではなく、つい手を出し過ぎてしまうことが多く、本人の本当の要望を正しくとらえることは簡単ではない。

自立ということを、その人が必要とする援助を必要とする時に受けられるようにしたうえで、一人ひとりが自分自身の生活の決定者となり、誰の被扶養者でもなく、誰の「居候」でもない、自分の暮らしの主人公となることと規定すれば、この基本の上に、それぞれの

能力に応じた仕事をし、その仕事に応じた賃金を得ることが、望ましい自立の形であろう。そのためには、作業能力の養成も必要であり、また生活の自己管理の訓練も欠くことができないものである。

生活の自己管理とは、単に身の自立とか金銭の管理ということではなく、自己決定とともに生活に喜びを見出すことができるということである。作業(仕事)そのものは辛いことでも、仕事をする生活に喜びを感じることができれば、自立生活の第一歩を踏み出したということができるであろう。

(たかはし・あきひろ 社会福祉法人嬉泉療育相談部長、袖ヶ浦のびろ学園嘱託医)